

文化論集第17号
2000年9月

[資料]

終戦前滞日ドイツ人の体験 (3)

—— 「終戦前滞日ドイツ人メモワール聞き取り調査」 ——

荒井 訓

「日本に住むドイツ人の大多数は貿易で暮らしている。砲手にして臼砲鍛冶だった300年前のブラウン、博学の自然科学者だった250年前のケンペルと110年前のシーボルトも貿易会社に雇われていた。東京の〈学者集団〉は、その最盛期つまり1880年代においても数の点では非常に小さかった。1860年代にはビジネスマンしか日本にいなかった。学者たちが来たのはようやく1870年になってからである。外交官たちですらビジネスマンに遅れて来日した。最初の公的な(プロイセンの)代表、オイレンブルク伯爵が1860年に日本との通商の糸口をつけるために来たとき¹、すでに10の商社が横浜と長崎で開業していた。そして、戦後の1920年8月にゾルフ大使とティール参事官が日本に来たとき、ドイツ人ビジネスマンたちはすでに再び地歩を固めていた」² (クルト・マイスナー『日本におけるドイツ人1639-1960』1961年)

日本に長期滞在した最初のドイツ人、ハンス・ヴォルフガング・ブラウンが

-
- 1 翌1861年1月24日に日普修好通商条約が締結された。
 - 2 Kurt Meissner: Deutsche in Japan 1639-1960 („Mitteilungen“ der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Supplementband XXVI), Tokyo/Hamburg (Otto Harrassowitz, Wiesbaden) 1961, 3頁

1630年代末にオランダの東インド会社に雇われて平戸のオランダ商館に来てから、日本とドイツが敵味方に分かれた第1次大戦（1914-18年）後の1920年代に至るまで、日本で暮らしたドイツ人の大半はビジネスマンだった。「終戦前滞日ドイツ人メモワール聞き取り調査」の対象となった1920年代以降も事情は変わらず、インタビューに応じてくれた人々のなかにもビジネスマンが少なくない。今号には、この意味において日本と最も深い関わりをもったドイツ人であるビジネスマンとその関係者の証言を集めて載せる。商社員としてあるいは自ら事業を起こしてビジネス界で働いた男性3人・女性1人と、ビジネスマンの夫あるいは父親をもった女性3人の証言である。

貿易商の息子として横浜に生まれたレーヴェダック氏は自身も貿易に携わり、一時はカメラマニア垂涎のヒット商品「ライカ」の代理店に勤めていた。後にカメラを作ることになる日本の大きな会社は、当時彼の会社からライカを買う卸売商だった。

コレンス氏は中国と満州で羊毛・ラクダの毛・カシミア・その他の毛皮・豚やイノシシの剛毛で作ったブラシ・木綿や大豆などを輸出し、ドイツの機械を輸入する会社に勤めていたが、独ソ開戦（1941年6月）および対米宣戦布告（同年12月）の影響を受け1942年に日本に渡って来た。

同様の経緯で1943年に天津から神戸にやって来たティーデマン夫妻は戦後も本国に送還されることなく、友人と会社をつくり1959年まで日本で暮らした。以下の証言は夫人のものである。

シュテューベル夫人は1939年に同じドレスデン出身のドイツ人家族の招きで旅行者として日本に来た。訪問を終えて帰途についたものの、香港から乗った船は、ちょうどそのときに起きたドイツ軍のポーランド侵攻の影響を受けて針路を日本に変更した。言わば運命のいたずらで日本に舞い戻った彼女は、化学薬品コンツェルン、バイアー社に秘書の職を得て1942年まで東京で働き、その

後上海へ渡った。

フォル氏もまた「運命のいたずらで」乗った船が針路を変えたために日本に漂着した。彼はナチスを嫌って1936年にドイツを脱出し南アフリカに渡った。そこで勤めた会社内の「現地生まれの労働者と白人の間の緊張」に耐えられなかったフォル氏はさらに上海に行く決心をする。しかし、上海に到着したその日に、日本人から逃れようと中国人自身が町に爆弾をしかけ、市内は死骸で埋まってしまった。そこでドイツ総領事が用意したマニラ行き船に乗ったところ、台風を避けて船は行き先を変え、着いた先は神戸港だった。1937年8月のことである。エンジニアだった彼は東京でドイツの紡績機を輸入する日本の会社に就職し、その後自立して当時東京で唯一人の真珠商となった。反ナチとして知られていた彼は戦後も本国に送還されず、現在も香港と東京に居を構えて暮らしている。

グリム夫人とリーネルト夫人はともに、レーヴェダック氏と同様、ビジネスマンを父親として日本で生まれた。彼女たちの証言には、子供の目の高さで見た当時の日本や滞日ドイツ人の暮らしが描き出されている。

マイスナーが「経済的な商品の交換は文化的な価値の交換を招来する」³と書いているように、ビジネスマンの活動が活発であれば必然的に文化交流の川幅も広がる。しかも、はるか遠く極東までやって来たビジネスマンたちの文化意識は高く、「教師」として来日したドイツ人たちとともに、彼らは日独文化交流の実質的な担い手でもあった。たとえば、以下の証言にもしばしば登場する「ドイツ東洋文化研究協会」(OAG⁴)は1873年に東京に設立され、今も存続している学術研究機関だが、71名の設立メンバーのうち50名はビジネスマンだった。OAGより早く、すでに1863年には初のドイツ人クラブ「ゲルマニ

3 前掲書70頁

4 Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens

ア」が横浜に、1868年にはクラブ「ユニオン」(1879年にクラブ「コンコルディア」に統合)が神戸につくられている。これらは社交クラブではあったが⁵、整備された読書室をもち、コンサートや芝居やバレエの公演などを盛んに催す文化的な施設でもあった。いずれも第2次世界大戦直後まで存続していた。「ゲルマニア」の発起人でありOAG設立メンバーの一人でもあったフォン・ブランドは回顧録のなかで、日本にいた「すべての外国人のなかでドイツ人社会はとくに精神的活動の領域において際立っていた」⁵と書いている。

ビジネスマンたちはOAGや社交クラブだけでなく、学校や教会等の設立にも有形・無形の貢献をしたが、ここではドイツ人子弟の教育のためにつくられた学校について触れておこう。日本生まれのレーヴェダック氏、グリム夫人、リーネルト夫人らが通った学校である。1903年、横浜に最初の学校が⁶、1909年には神戸にも学校がつけられた。はじめクラブに併設されていた神戸の学校は1938年に新校舎が建てられた。横浜の学校は1909年に自前の校舎をもったが、1913年に火事で焼失し、再建された校舎も1923年9月1日に起きた関東大震災で破壊された。その後授業は大森の仮校舎で始められた。その結果、次第に家族もちのドイツ人が大森に集まるようになり、1933年に新校舎が大森に完成した。当時の様子についてはグリム夫人の話に詳しい。ちなみに、この学校は1991年に再び横浜に移転し、現在に至っている。

こうして第2次世界大戦前頃までに、東京(横浜・大森)と神戸を中心に環境を整備したドイツ人社会が形成されていた。しかし、もとより戦雲におおわれた時代に生きた彼らが安定した暮らしを享受できたわけではない。以下は、終戦当時3000人内外いたと推測される滞日ドイツ人の中核をなしていたビジネスマンとその家族たちの証言である。

5 前掲書58頁

1. エドゥアルト・B・レーヴェダック氏の体験

Eduard B. Levedag: 1912年12月19日横浜生まれ。日欧貿易商会において1931年から1933年まで見習い、1933年から1947年まで社員。1943年から「マリン・ジャンパー」による本国送還（1947年）まで箱根の強羅においてシュミット商店（東京）のメルク担当部長。1959年から1982年まで年2回日本と中国に滞在。1951年から1960年までコレンス & CO（東京）のフランクフルト手形呈示人。1961年から1979年までLurgi 協会会長および外国事務局長。

私は横浜で生まれ、1919年に両親と東京郊外の大森に転居しました。ここにはドイツ学園もありました。1943年に安全上の理由で東京を離れなければならなくなるまで東京と横浜に住みました。当時私は結婚していて2歳の息子がいました。戦況が悪くなり、空襲が始まればドイツ人にとって東京はもはや安全ではない、と同盟国だった日本側から忠告を受けたのです。もっとも空襲が始まったのはしばらくあとになってからでした。私たちは、ほかの何組かの夫妻と一緒に箱根山の強羅に移ることを決めました。小田原から登山鉄道に乗り、15分ほどで終点の強羅に着きました。そこには豊かな日本人たちの小さなサマーハウスがたくさんあり、戦争中は空き家になっていました。一人の管理人が全ての家の鍵をもっていて、私たちに家を見せてくれました。私たちは登山鉄道の駅のすぐそばにあった林学の教授、ホンダ・セイロク氏の家を選びました。私たちの家の庭には素晴らしい杉が聳えていて、すれば魚釣りもできた小さな池がありました。残念ながら大きな杉のおかげで陽当りはよくありませんでした。ですから私は家主を訪ねて、何本か木を切り倒す許可をもらいました。冬の間中薪木には不自由しませんでした。しかし、切り倒した木を燃やすことはありませんでした。木を切らせた男がこれに強い関心を示したので、彼にやり、代わりにその杉の2倍の薪木を受け取りました。

疎開してからも私は東京での仕事を続け、毎週金曜日に山にいた妻のところへもどりました。野菜などの食料を東京で買って帰りました。山のなかには何もなかったからです。物々交換するために時々谷の農家のところに降りて行きました。私たちは煙草をもって、野菜やミカンと交換しました。そのほか、私たちは第10仮装巡洋艦「トーア号」の戦利品を受け取りました。このドイツの仮装巡洋艦はオーストラリアの船を拿捕し、この船には、コンビーフ、いわゆるカンガルー・ソーセージ、ハットヤラードなどがあり、私たちは毎週1缶受け取りました。ドイツ大使館がドイツ人に配給していたのです。

この仮装巡洋艦は横浜で爆発炎上してしまいました。そのとき私はちょうど東京から横浜へ向かう列車に座っていて、連れに「見てごらんよ。あれはHK（仮装巡洋艦）10じゃないか」と言いました。この船と一緒にドイツのタンカーと、拿捕され私たちにたくさんの食料を言わば無料配達してくれたオーストリアの船も爆発しました。このとき58名の水兵が亡くなりました。恐ろしい事件でした。

ドイツ人が住んでいた土地にはどこでも食糧配給所がありました。たとえば強羅では私の兄がその仕事を引き受けていました。この配給に対して私たちはほとんど代金を払いませんでした。ほかに日本政府がドイツ人社会に大量の魚の缶詰を提供してくれました。本来はドイツ向けに製造されたものが、輸出できなくなってしまったのです。安全な輸送手段がなくなっていたからです。このような貨物は潜水艦で運ぶほどの価値はありませんでした。私はドイツ政府のためにいろいろな品の買い付けをしていました。たとえば大量のカフェインがありましたが、それはおそらく主として航空兵のためだったのだらうと思います。それはその後10キロ単位でパックされ、潜水艦でドイツに運ばれました。もっとも、それが到着したのかどうか、私は知りません。

そのほか、私たちは日本の配給も受けました。一人あたり600グラムの米かパンでした。ですから不平を言うことはできませんでした。私たちは飢えな

かったのです。

まだ東京で仕事をしていたとき、私は皇居が見えるアパートを借りていたのですが、毎朝6時に皇居から聞こえてくる衛兵のラッパの音で起こされました。このアパートは7階建てで、最初の洋風建物のひとつでした。

私は洗濯物を強羅から東京にもって行きました。強羅の水は硫黄を含んでいて、洗濯には向かなかったからです。洗濯物の包みを東京のアパートの部屋に置いておくと、角の洗濯屋が取りに来ました。アパートの管理人が承知していて、金曜日には洗濯物と請求書が机の上に置かれていました。ある土曜日東京に空襲があり、強羅で空襲警報を聞きました。月曜日に東京に戻ると、会社で、私が住んでいた家は焼け落ちてしまった、と教えられました。ちょうどその前の金曜日に、洗濯物が予定どおりに仕上がってこなかったために、私はそれを箱根にもって帰れませんでした。市電で飛んで行くと、7階建ての建物は夜のように黒くなっていました。管理人は私に誤りましたが、そんな必要はありませんでした。アメリカがやったことだったので。管理人と一緒に7階まで上がりフロアーを歩いてみると、どこもかしこも穴だらけで、洗面台は灰色の塊になっていました。焼夷弾の熱で全てはなくなってしまいました。床はすっかり焼けていました。私が部屋に入ろうとすると、ドアは開きませんでした。そこで私たちはドアを鉄の棒でこじ開けました。そうしてなかを覗き込むと、全てがちゃんとありました。44のアパートのうち、私のアパートは唯一無傷でした。窓はなくなっていました。窓台にはガラス玉がいっぱい落ちていました。もとは白かった私のベッドカバーが茶色になっていました。一番きれいだっただのは、机の上の洗濯物でした。角の洗濯屋は焼けてしまいました。

皇居の広大な敷地にはもうひとつの記憶が結びついています。1930年代に日本は政治的に混乱していて、経済は悲惨な状態でした。1936年2月にクーデターが起きました。私自身が体験したこの事件はこうでした。皇居全体が若い将校と兵隊に囲まれました。そのとき雪が降っていて、男たちはくるぶしまで

あった雪のなかに立っていました。これほど雪が降るのは東京では稀でした。皇居の周囲には堀があり、ひとつの側にいくつかの省のための公邸と大きな建物がありました。そこには当時首相も住んでいました。そこから少し離れたところに雰囲気の良い幾筋かの通りがあり、東京で最初のナイトクラブのひとつがありました。そこにはダンスの相手をする女性たちがいて、彼女たちのために金を払わなければなりませんでした。チケットを買い、席を取り、レモネードか紅茶かコーヒーをもらいました。アルコールはありませんでした。それからきれいな女性たちを観察して、一人を選びました。女性がやってきて、彼女と踊り、ダンスを終えるとチケットを渡すのです。それは私たちの楽しみでした。友人の一人がちょうどこの冬の日、またあのクラブに行こうと誘ってきました。皇居の周りの至るところに軍人の姿が見られましたが、私たちは何が起こったのか知りませんでした。私たちが皇居沿いに歩いて行くと、一人の兵隊が私たちに「どこへ行くつもりか」とどなりつけてきました。私たちは大急ぎで立ち去りました。すでに不気味な雰囲気が漂っていました。事件は4、5日に続きました。

私はダルムシュタットのメルク社の仕事をしていましたが、7ヶ月間その代理店だったシュミット & CO のために働きました。創業者のパウル・シュミットはライツ・ヴェツラーの代理店をしていました。彼にとって「ライカ」が発明されたのは大きな幸運でした。このカメラは日本で人気商品になり、日本は2番目の買い手になったからです。後にカメラを生産するようになった日本の大会社は、私たちの会社からライカを買っていた卸売業者でした。

老シュミットは箱根に美しい家を建てていました。芦ノ湖の岸まで続く庭付きの2戸建て住宅でした。それに小さなボートももっていました。家の右の部分に彼と彼の客が滞在しました。私たちドイツ人同僚（8、9人でした）は、台所といくつかの寝室のある左の部分に滞在することができました。その頃はまだ

土曜日の晩まで働いていましたが、私たちは夏の土曜日の午後には箱根に行くことを許されました。私たちは箱根に行くとともに素晴らしい湖に飛び込みました。あそこの水はとても冷たくて、それでよく風邪もひきました。現在ではこの家は取り壊されています。かつて家があった場所に「パウル・シュミットー箱根に住んだ最初の外国人」という碑が建てられています。

あるとき私はバイアースドルフ社から、社員のシルト氏が日本に行くという電報を受け取りました。彼は本当は上海へ行くはずだったのですが、日本軍が上海を包囲したため船が揚子江に入れず、日本に向かったのです。彼を迎えるのが私の仕事でした。私は彼を船からピックアップし、ちょうど週末だったので、箱根の宮ノ下ホテルに連れて行きました。私たちが戦争中住んでいた強羅はその上のほうにあります。車で海岸沿いの道を走りました。太陽はすでに沈んでいて、遠く伊豆半島まで見えました。ちょうど私がシルト氏に美しい景色を指差して教えていたときに、ドンという音がして、物体が道路の上を飛びました。2、3メートル戻ってみると、私が子供をひいたことが分かりました。その子は死んだように地面に横たわっていました。二人の女性が道端から飛んできて、その子を抱き上げると、その子はわめき始めました。顔に引っかき傷があり、血が少し出ていました。私はこの子をその女性たちと一緒に近くの町の医者まで車で運びました。幸い重傷ではありませんでした。骨折はなく、擦過傷だけでした。医者に支払いをしようとしていたときに警官が入ってきて「あなたが運転手ですか。たった今事故のことを聞きました。一緒に来てください」と言われ、警察署まで行きました。シルト氏はその間車に座っていました。「待っていてください」と私は彼に言いました。「すぐに戻ってくると思います。もし私が逮捕されたら、すぐ分かるはずです」。

私はそれからその警官に、事故の様子を話し、25円の治療費を引き受け、別に5円渡すつもりであると説明しました。「それはご親切さまです」と彼は言い、一緒にいた女性たちに向かって「恥ずかしく思いなさい。旦那たちは漁に

出ているのに、あんたたちは道に突っ立って馬鹿話をしている。そして、この気の毒な外人さんはあんたたちに5円下さるといふんだ。家へ帰りなさい」と言いました。数分後私が外に出ると、その二人の女性が車の前に立っていました。シルト氏は、彼女たちが彼にからんでいるのだと思っていたので、私を見てほっとしていました。彼女たちは彼に日本語で礼を言っていたのですが、彼は一言も分かりませんでした。それは愉快的な光景でした。彼女たちは、私が運転手で彼が私の主人だと思っていたのです。当時はまだ自分で車を運転することはなかったからです。

私の会社では日本人社員も雇っていました。仕事上では日本人の同僚と良い関係にありましたが、日本人の家に招かれるのは稀でした。会社の日本人女性との付き合いなどなおのことです。彼女たちが西洋人と通りを歩くなどということは考えられませんでした。戦後アメリカ人が日本人女性と手をつないで歩いているのを見たとき、私たちはひどく驚きました。

もちろん売春宿はありました。横浜の一角に売春宿が軒を並べていました。いつも営業中でした。私たちは、5、6人の同僚と一緒にときどきそこに行きました。残念ながらそこで貰い物をして来ることもありました。私の会社にはよく効く薬があったので、同僚たちに注射器と錠剤を渡していました。彼らはそれを溶かして自分であそこに注射しなければなりません。ちょっとヒリヒリしました。あういうものはすぐには治りません。当時はまだペニシリンはありませんでした。鉛を含んだ薬品でした。いつも私は薬をやった連中たちをあついで知り合いの日本人医師のところへ行かせました。

話を戦争にもどしましょう。戦争末期にはすべての物資が乏しくなっていました。

衣服を手に入れることも問題でした。私は上海にいた1940年に、ウィーンか

ら来ていたユダヤ人の仕立屋にスーツを3着作らせ、その後も彼に注文していました。彼は新しいスーツを日本に送ってくれました。あるとき横浜で受け取ろうとすると、私のスーツはなくなっていました。輸入許可証がなければ輸入は許されない、と言われました。5日後に輸入許可証をもってハパーク・ロイド社のオフィスに私の荷物を引き取りに行きました。ここでは「ドイツ大使館に渡しましたよ」と言われました。しかし本当は私のスーツは紛失していたのです。私は海軍武官に苦情を訴え、横浜にいた中国人の仕立屋に3着のスーツを作らせ、代金を大使館に払ってもらいました。

私は1947年まで日本にいました。私たちはこの年にアメリカによって本国に送還されました。帰国の旅には、自分で運べるものしかもっていくことを許されませんでした。ほかのものは全部取り上げられました。金も没収されました。私たちは一人当たり750円受け取りましたが、当時はそれが500マルクでした。それでも、1年後にはその金の価値が10パーセント上がりました。

(聞き取りは1994年11月18日にフランクフルト/Mで行われた)

2. クラウス・コレンス氏の体験

Claus Correns: 1909年9月3日、東プロイセン・ラグニット郡ジュラの上級林務官の家に生まれる。1935年6月20日から1939年1月まで中国・天津に、1939年から1942年まで満州・奉天（現在の瀋陽）にジームセン & CO 社の支店長として在任。1942年5月から1989年12月まで東京在住。終戦までジームセン & CO の支店長。1948年から1989年までコレンス商会（ドイツ製機械の輸入）経営。

私は、父方が代々やっていた上級林務官に採用されなかったので、貿易商になろうと決心しました。私の見習期間はハンブルクで2年間、月給は25マルクから40マルクでした。それから1年間無給でしたがロンドンで働き、その後再

び2年間ハンブルクで店員として働きました。月給は税込みで143マルクでした。私は、見習をしていた南アフリカでは職を見つけられませんでした。私の友人たちが有名な陶磁器の会社で徒弟をしていて、中国に行くようにと強く私にすすめました。

そこで私は中国に行き、職を探しました。私は、第一級の学校を卒業し、第一級の会社で見習をしたので、本当はリスクを犯す理由はありませんでした。南アフリカにいた父の友人が私に200英ポンドを貸してくれ、父はハンブルクから上海への旅費（78英ポンド）を引き受けてくれました。友人たちは、中国の会社や知り合い宛の紹介状（全部で42通）を用意してくれました。海の旅は素晴らしいものでした。8週間続き、私は遅延があるたびに喜んでいました、というのは、私は中国での職をまだ得ていなかったからです。1935年5月5日に私たちは上海に着きました。

上海に私は1935年6月20日までしかいませんでした。天津に職が見つかったためです。上海では、ハンブルク時代の友人（バイエルン出身）のところに世話になりました。彼は私を、ハンブルクとブレーメンの大きな商社の中国支社長たちに引き合わせてくれました。彼らのうちの何人かは、すでに阿片戦争（1840-42年）の時代から中国各地で活動していた組織をもっていました。たとえば、ハンブルクを本拠としていた天津のカルロヴィッツ & CO とジームセン & CO です。北中国担当の共同経営者は、エミール・ヤニングス（有名な俳優）の弟、ヴェルナー・ヤニングスでした。私は25歳で、結婚したいと言うと、「(英語で)若い娘と結婚して、ラフに扱い、大事なことは何も教えるな」と忠告されました。上海には「ハイ・ライフ」があり、みんなが身分不相応な暮らしをしていて「何デモアリ」でした。

北京からそれほど遠くない天津で、私は1935年から1939年までジームセン & CO の輸出部の部長をしていました。当初自分が売るべきものについて何も

知らなかったことは言うまでもありません。しかし、それを学ぶのに4ヶ月ありました。それに、信頼して任せられる中国人の専門職員が十分にいました。私の仕事は実に多岐にわたっていました。おもに、羊毛、ラクダの毛、ヤギの毛、カシミア、毛皮、豚の剛毛、人間の毛髪、木綿などの輸出で、養鶏などもあり、実に多様でした。

私の上司、ヴェルナー・ヤニングスは、本にも載っているような企業家であり、無鉄砲な男でしたが、圧延機や鉄道資材や武器の販売は差し控えていました。それらには多数のAEGタービンも必要でした。

天津にいた外国人は、運送業と銀行と炭坑を例外として、ほとんどは貿易に携わっていましたが、互いに仲よく付き合っていました。私たちは、競馬、騎乗の狩、テニス、ホッケーのようなスポーツや、ウサギやガチョウや野雁の狩などのときに会っていました。私たちの生活は植民地のイギリス人の生活によく似ていました。私たちドイツ人は、ヨーロッパで戦争が起こるまで、どこもなく中国人の保護下にありました。

1938年の終わりに、ヤニングスは私を呼び寄せ、ジームセン & CO は満州に支社を開きたい、そのためにパイオニアを必要としている、と打ち明けました。彼が考えられる唯一の人物は私で、この仕事を引き受ける気があるかどうか、ということでした。当時の大ドイツの23倍もあった国の大きさと仕事の大きさが私を刺激しました。ほかの誰もそのポストを欲しがらないだろう、という考えは浮かびませんでした。しかし、誰も天津の良い生活から離れたがらないのは確かでした。でも私はそれを後悔しませんでした。

奉天（現在の瀋陽）に私は1939年から1942年までいて、同じ年齢のドイツ人同僚と一緒に、中国人の裁判官が所有していた古い洋風の家に住んでいました。この人は私の友人に「われわれ中国人には、西洋人が」*»fiat justitia, pereat*

mundus«(たとえ世界は滅びようとも正義は行われよ)という命題にしたがって判決を下すということが理解できません。法は人間のためにあるのであり、人間が法のために存在しているわけではありません。われわれ中国人にとっては、天の下に人が調和的に調停できないものはひとつもありません」と言いました。

満州は、地下資源、あらゆる種類の鉱石や露天掘りの第一級の石炭などが非常に豊かでした。興りつつあった産業はドイツの大きな支援を受けていました。オットー・ヴォルフは5000万(マルク?)以上の国家間協定を結びました。当時としては非常に大きな額でした。機械と引き換えにドイツは、年に最大110万トンの大豆を受け取りました。土地は非常に肥沃であり、中国人の労働者は勤勉で欲がありませんでした。

住民は、4000万人の中国人、100万人の日本人、朝鮮人、本来の満州人、ロシア人から構成されていました。行政は純日本的でした。「満州皇帝」と中国人の大臣は何も発言できませんでした。私は羊毛商に、彼が日本人をどう思っているかきいたことがあります。「私たちが歩いているここに、自分の服が残されていたとは信じられませんでした。しかし日本の米はまずい」というのが彼の答えでした。安全のため、日本人は中国人に武器の所有を禁じていました。そのことが、私とロシア人の狩仲間(最後のロシア帝国奉天総領事の息子)にはプラスでした。無数のキジや、渡り鳥の季節にはシベリアから南へ移動する野生のガチョウやカモがいました。冬には週末になると私たちは零下28℃まで気温が下がっても狩に行きました。もっとも命中率は最低でした。夏には私たちはドイツ人クラブでテニスをしました。

満州の生活は、急使たちがシベリア鉄道を双方向に利用し、途中奉天のホテルに泊まったので、ニュースを知るという点では面白いものでした。彼らは私たちに、ドイツの状況について知らせてくれました。独露戦争が始まってからは、奉天も満州全土も荒涼としてしまいました。私たちが米国用に買ってあった在庫ウールの輸出は難しくなりました。日本がオーストラリアで羊毛を買え

なくなり、軍が繊維不足のためにウールの輸出を禁じたからです。私たちは、ウールを売って十分な利益をあげられる日本への輸出許可を得ることに成功しました。やはり繊維が欠乏していたドイツのために、私たちは1,200トンの麻を購入してありましたが、戦争のためにもはや船で送り出すことができませんでした。満州政府はそれも自国のために取っておきたかったのです。しかし、参事官のヘルフェリヒは東京での交渉で、シベリア経由でドイツへ麻を送る許可を取りつけました。その間に、独露戦争が勃発し、ロシアに侵攻したドイツ軍は私たちの麻の一部をシベリア鉄道のなかで見つけました。

私は、ドイツ人の支社長と部長たちが1939年9月13日に、つまりヨーロッパで戦争が始まったあとで、取締役たちと状況について話し合うために天津に呼ばれたことを覚えています。ヴェルナー・ヤニングスはちょうど、ヨーロッパと米国への2年間の出張から帰ってきたところでした。彼は私たちに、米国はまちがいなく対ドイツ戦争に介入し、ドイツは戦争に負けるだろう、と説明しました。そうなれば、ジームセン & CO は敵に閉鎖されてしまうから、私たちはしばらくの間自分で自分の面倒を見なければならなくなる。いずれまた一緒に仕事ができるだろう。終戦まで、どんな仕事でもできる限り多くやらなければだめだ、ということでした。戦争にもかかわらず私たちが成し遂げたことについて具体的に言えば、私たちは15,000枚のロバや子馬などの毛皮をシベリア経由でハンブルクに送り、馬の尾の毛を米国に、髭剃りブラシ用のアナグマの毛を2箱米国に、豆腐を混ぜ合わせた多量の蜂蜜を「上海煙草」の製造用としてブリティッシュ・アメリカンタバコ社に送りました。

1939年9月13日に天津に会議に出かけたとき、白河が氾濫して天津の町を水没させました。チフスの伝染を防ぐために、日本の占領軍は、白河橋を渡るすべての中国人にチフスの予防接種をさせるよう命じました。中国人の間では、この予防接種は中国人を妊娠不能にさせるためのものだという噂が広がりまし

た。予防接種済みの証明書を売るために、ある中国人は何度も接種を受け、とうとう死んでしまいました。

戦況がますます深刻になり、日本政府はついに、多くの占領地における大規模な投資について集中的に日本で決定することにしました。そのため、私たちの会社は1942年に連絡事務所を東京に開くことにしました。私の友人、カール・レーヴェンシュタインと私が所長の候補にあげられました。ヤニングスは私の友人で大豆のバイヤーだったW・ゾーストマン（ハンブルク出身）に助言を求めました。「一人はユダヤ人の名前をもち、もう一人はユダヤ人の祖父をもっている（私のこと）。コレンスの方をお取りなさい」というのが答えでした。

最初は親中国、反日本だった私の考えは、満州での3年間で変わりました。すでに、周囲の世界が根本的に変わっていましたが、その間に私は多数の日本人のジェントルマンと出会っていたからです。

私の任務は、日本の当局やドイツ大使館との関係を保つことにありました。しかし、私は何か具体的なことをした記憶はありません。私たちは、まったく無意味だったのですが、ドイツの飛行機会社の中国および日本向けの取次ぎとして交渉にあたっていました。あたかもそれがたいへん重要であるかのようにやっていました。ドイツ経済にとって重要な商社が利益をあげられるようにと、商社はタングステン鉱（中国とビルマ）や麻（フィリピン）や戦争に必要な他の原料の調達をするよう指示されていたのです。

日本人との個人的な関係は良かったのですが、戦争が進むにつれ、民族主義的な緊張が広がりました。フランクフルト新聞の特派員だったリヒャルト・ゾルゲがスパイだったと分かり緊張は増しました。彼は、ロシア軍の司令部と無線で連絡を取り、日本の戦争内閣のなかに密偵をもち、ドイツ大使館がベルリ

ンから受けていた電報に通じていました⁶。ゾルゲの成果は日本人に害を与えただけでなく、ドイツの戦争指導部にも決定的な影響(スターリングラード)を与えました。その結果、私たちが疑われ、私は警察から中立国の人間とはつき合わないよう忠告されました。中国人のコックのおかげで、私は警察とはとても良い関係にあったのです。彼らは私たちのところに週1回中国料理を食べに来て、私にとって不利なことが言われているとそれを知らせてくれたのです。

日本人家庭の食糧調達はたいへんでした。主婦たちは、小さな大根1本手に入れるのに何時間も行列しなければなりません。私自身にはなんの問題もありませんでした。中国人のコックが、私の必要とするものをすべて調達してくれたからです。その多くは捕虜収容所から来ていました。コックはそこで、日本人のルートをとおして、たとえばイギリスのマーマレードやヨーロッパのマスタードをタバコと交換して手に入れていました。それに、イギリスやオーストラリアの商船をヨーロッパへの途上で拿捕したドイツの「武装商船」の戦利品もありました。日本にとどまっていたドイツ海兵たちはパン焼き釜を作り、ドイツ人社会にドイツのライ麦パンを供給したりしていました。

最初の9ヶ月間、私は、多くの外国人が泊まっていた「帝国ホテル」に住んでいました。それから近代的な設備の調った屋敷を買いました。そこで私たちは夜毎ブリッジやスカートやポーカールームに興じていました。この家の購入は1939年の開戦のときに天津で10箱のホワイト・ホース(ウイスキー)を買っていたことで可能になりました。これが、戦争が始まって3年の間にたいへん高価なものになっていたのです。その売上を元手に日本で米ドルを正規レートで買い、これを天津の友人に送って、自由レートで日本円に換えてもらいました。この楽しいゲームを私は、金を充分にかき集めるまで繰り返しました。これは

6 当時在日ドイツ大使館員だったクラブフ氏の証言によれば、ゾルゲが大使館で手に入っていた情報は戦況を左右するほどものではなかった。『文化論集第16号』154-155頁参照。

すべて完全に合法的でした。

アメリカ軍の空襲はますます頻繁になり、人的被害もどんどん増えていきました。住民の木造家屋の周りに焼夷弾が投下されたため、閉じ込められた人々は、ほとんど逃れる可能性がありませんでした。火は暴風のような速さで中心部に集まってきました。

私は、ある空襲のときに、近くにあった明治公園に避難しました。あそこで私は3人の日本人のチンピラに襲われました。彼らは私をアメリカ軍の落下傘部隊員だと思ったのです。一人の兵隊が私を捕らえましたが、すぐに、私がアメリカ人ではないことに気づいて、家へ帰るように忠告しました。真夜中過ぎだったので、同じような体験を繰り返さないように、私は橋の欄干の上に座って夜が明けるのを待ちました。一人の疲れ果てた老婦人が橋を渡ろうとしていて、ようやく最後の瞬間に私の方を見ました。彼女は明らかに私を幽霊か悪魔だと思い、その場でくるりと向きを変えて引き返して行ってしまいました。

夜が明けてから私は家路につきました。残っている家はわずかで、私の家も焼け落ちていましたが、私の使用人たちは被害を受けていませんでした。明治神宮前の大きな十字路で、市電のレールの上に一人の婦人が座っていました。彼女は明治天皇の方角にお辞儀をして、息を詰まらせていました。その光景は私を深く感動させ、気持ちを鎮めてくれました。

箱根の宮ノ下の富士屋ホテルで、私は天皇ヒロヒトの宮廷日本語のラジオ放送を聴きました。その話は、周りにいた日本人たちですらほとんど理解できませんでした。ナガイ女史は泣いていましたが、私はなぜだか分かるように思いました。通りでは警察官たちが座り込んで、彼らが私たちについて書いていた報告を焼いていました。これで終わりでした。

(聞き取りは1995年7月27日にトゥツィング Tuzing で行なわれた)

3. カローラ・ティーデマン夫人の体験

Carola Thiedemann: 1916年7月19日、ブレスラウ生れ。ハインツ (Heinz)・ティーデマンの妻として1943年1月から1959年5月まで東京に住む。

夫と私はカルロヴィッツ & CO の指示を受け、1943年1月に中国から日本に行きました。私たちは小さな日本の船で天津から神戸に行きましたが、日本人ばかりの乗客のなかで唯一のドイツ人でした。私たちは一言も日本語ができませんでしたが、この4、5日間を何とか切りぬけ、とても大切に扱われました。日本人の英語はごく初歩的でした。

最初の2ヶ月間、私たちはホテル住まいをしました。まだ何も破壊されてはいませんでした。東京の住宅事情は、あの時代には良くなかったからです。空襲は1944年になって始まりました。にもかかわらず、すぐに適当な住居を見つけるのは難しかったです。まだ戦争は遠くにあるように思われました。ドイツから聞こえてきたのと同様、勝利の報告ばかりでした。

私たちは、空襲が1944年に始まったとき、山の保養地である軽井沢に小さな家を見つけました。夫の会社はまだ東京にあったので、私はよく一人になりました。彼は3、4週間毎に軽井沢にきました。鈍行列車で4時間くらいかかりました。私は農園をつくって小さな犬と一緒に暮らしていました。もちろん私たちには友だちがいましたが、私たちは中国からきたので、日本在住のドイツ人のなかでは幾分アウトサイダーという感じでした。

軽井沢に疎開したときには、家具の運搬に苦労しました。個人的使用のために東京からトラックを1台チャーターすることはできませんでした。私たちの利口なコックは人を3人集め、私たちのささやかな引越し荷物を200キロ離れ

た軽井沢まで徒歩で運ばせました。全てが到着するまで4日かかりました。上りのきつい最後の区間のために彼らは馬を1頭借りました。彼らには良い報酬を支払いましたが、近くの旅館で彼らは賃金を残らず酒に使い果たしてしまいました。このことはすぐに村中に知られるところとなりました。とくに、狂った外国人が戦争のさなかに家具を全部山のなかへ運ばせたという話は知れ渡りました。

戦争中私たち外国人は物々交換で米を手に入れました。それに対して日本人は食料カード（ハイキュウ）をもっていました⁷。賄いを通じて私たちは闇市と接触していました。そのほか、私たちは、よく卵を生む鶏を手に入れました。軽井沢での食料調達がひどい状態になることも時々ありました。そういうときには私たちはミソ・スープ（発酵させた大豆のペーストで味付けされたスープ）を食べました。それはとても美味しく、非常に健康的でした。

私たちは、小さな家の前に使われていない広い土地があるという幸運に恵まれていました。夫と私は骨の折れる仕事をこなしてこの土地を耕し大きな野菜畑を作り、ジャガイモ、ニンジン、キュウリ、トウモロコシなどたくさん作りました。こうして難局を乗り越えました。

東京では私たちは日本人とあまり付き合いませんでした。付き合いのあった日本人と言えば、まずあげられるのは、いつもたいへん親切だったサラリーマンたちですが、彼らの家に招かれたことはほとんどありませんでした。1度か2度あったと思いますが、それは特別のことがあったときでした。彼らとの関

7 たとえば、レーヴェダック氏やフォル氏の証言（6頁および32頁）によれば、ドイツ大使館を通じてドイツ人にも配給が行なわれていた。ドイツ人社会には加えて「特別配給」もあったはずであり、ティーデマン夫人がなぜそれに言及していないのかは不明。

係が深まらなかったのは本当に残念です。ことばの問題もありましたし、女性が社会生活のなかで何の役割も演じていなかったためでもありました。

私たちは、ドイツが戦争に負けるまでは、とても親切に日本人に扱われました。ドイツの降伏後は、友好的な関係も終わりました。日本は軍事的に見捨てられたと感じたからです。日本国内の旅行は困難になりました。当局はありとあらゆる面倒を押しつけてきました。「枢軸友好」はもはや感じられなくなりました。日本が降伏したとき、事態はふたたび良くなりました。しかし、権力をもつ人間と一般の日本人を区別しなければなりません。花屋、骨董屋、八百屋、肉屋、こういう人々はいつも親切でした。私たちをうんざりさせたのは役人たちでした。

たとえば、夫は、中国にあった自分の会社宛電報のことで苦勞しました。彼は仕事で円相場について報告しなければなりません。彼がオフィスから帰ってくると、すでに日本の秘密警察が家の前で待っていて彼を連れて行きました。どこかの地下室で彼は1日中尋問されました。円の評価の話でした。つまり、「円は悪貨だ」と私の夫が主張したというのでした。あとで、心臓が喉の方まで高鳴った、と夫は言っていました。彼はそれから、謝罪文を書かなければなりません。もちろん彼はそれに同意しました。そうしなければ、大変なことになっていたでしょう。

戦況とドイツの状況について私たちはあまり知りませんでした。大使館員を知っていれば幸運でした。彼らがドイツから得た情報で、英字新聞では読めない情報を知ることができたからです。たとえば、エルヴィン・ヴィッケルト⁸や他の若い大使館員が私たちに情報を伝えてくれました。軽井沢にいた私たち

8 Erwin Wickert: „Mut und Übermut“ 1991, Stuttgart (『戦時下のドイツ大使館』佐藤眞知子訳、中央公論社、1998年) など日本に関する著書がある。ドイツ作家協会会長 (1994年～)。

は、戦争で何が起きているのかまったく知りませんでした。広島に原爆が投下されるまでは、勝利しか聞かされていませんでした。

私たちは日本にいる自分たち自身のことと母国の親類のことを心配していました。それが一番の心配事でした。私たちはほぼ1年半、ドイツの家族のことについて何も分からなかったからです。最初はまだ電話をすることができましたが、最後の年はまったく不可能でした。1945年の年末、赤十字の25語の電報が初めて届きました。「家族全員元気。家は破壊された」という内容でした。私たちは情報という点でも島国にいたのです。米軍が上陸した1945年以降、日本から情報を送ることができるようになりました。しかし、ドイツでは占領地域のなかでの情報伝達はまったくありませんでした。私たちはアメリカあるいはスイスを経由して連絡を取ることを試みましたが、ドイツとの直接の連絡は長い間不可能でした。

1945年に激しい空襲がありました。私は幸い空襲を体験しませんでした。夫も運よく空襲を逃れました。というのは、彼はこの時ちょうど軽井沢に来ていたからです。焼夷弾が東京の私たちの家に命中しました。東京にいれば彼は生き延びてはいなかったでしょう。

ドイツとは違って、防空地下室はありませんでした。地面を掘り、木で蓋をした穴しかありませんでした。東京の家の前にはそのような穴しかありませんでした。軽井沢への空襲は一度もありませんでした。

広島に原爆が落とされた日のことを私はまだよく覚えています。何か恐ろしいことが起こったらしい、とどこからか伝わってきました。恐ろしい真実が知らされるまで2、3日かかりました。それから天皇は国民に語りかけましたが、皇室のことばだったので、何が起きたのか、そして戦争に負けたということをも日本人が理解するには時間がかかりました。

終戦後、夫と私は9ヶ月間軽井沢で一緒に暮らしました。私たちの身に何が

起こるのかすぐには分からず、待つしかありませんでした。トランクに荷を詰めての生活でした。会社も無し、お金も無し、家も無し、でした。援助は何もあり得ませんでした。大使館ももはや存在していなかったのです。私たちは日本ではもはや招かれざる客でした。実際、ほとんどのドイツ人は退去しなければなりません。私たちは幸い残ることができ、本国に送還されませんでした。

1948年にやはり日本に残ったドイツ人の友人が会社をつくり、1年後に共同経営者にならないかと夫に言ってきました。そうして私たちは生活を立て直したのです。1954年に初めて私たちは、アメリカ占領軍によって発効され、入国のときには疑いの目で見られた旅行証明書をもってドイツに帰りました。私たちのドイツのパスポートは失効していたのです。

(聞き取りは1995年3月23日にハンブルクで行なわれた)

4. カロリーネ・シュテューベル夫人の体験

Dr. Caroline Stübel: 1910年6月14日、ドレスデン生まれ。1939年5月から1942年春までバイアー社の秘書として東京に住む。1942年5月上海へ移住。のちに外務省勤務。

私はまったく個人的な理由で日本に行きました。ドレスデン出身のある家族が私を日本に招いてくれました。訪問期間が終わり、帰国の途についたのですが、この旅は再び日本で終わることになったのです。香港から乗った船はガラガラでした。1939年、戦争勃発の直前でした。船が出航すると、突然、ドイツがポーランドに侵攻したというニュースが飛び込んできました。船に乗っていたのは、伝道教会に呼び戻された宣教師だけでした。私たちは晩に甲板の手すりに寄りかかって空を見上げていました。すると突然「われわれはもう西へは

向かわない。東に進むことになった。航路を変更したんだ。」という声が聞こえました。ずっと後になって私は外務省で、定期船は航路あるいは目的地で戦争行動が起きた際にどうすべきかという指示を封印した封筒を携行していた、と聞きました。あのとき船長は封印されていた封筒を開け、もはやジェノヴァに向かうべきではなく、まずマニラに行き、それから日本に向かうべきであるということを知ったのです。

こうして日本にもどった私は自立しました。私は、速記とタイプができる、と言って自分を売り込みました。商社が社員をヨーロッパから呼び寄せることが難しくなっていて、そのおかげで私はバイアー社に職を見つけ、5時に終わる規則正しい仕事の日々を送ることになりました。

私は日本でも旅行をすることができました。安全のため日本の文字で「私はドイツ人です。私の名前は……。私は……で働いています。私は東京に住んでいます」などと書いた紙をもち歩いていました。それを私は日本語でも言うことができました。そうして一人で伊豆半島や高野山を旅行しましたが、危険を感じたこともありませんし、差別待遇されていると感じたことも一度もありませんでした。

私は旅行が好きで、バスや鉄道に乗って日本中を旅行しました。富士山のシルエットが現れたときには、周囲の人々と一緒に「ああ」と大きな嘆声をあげました。1939年にはまだ、旅行をするために許可を得る必要はありませんでした。その後事態は変わりました。軽井沢か鎌倉へ行きたいときには、「許可(Permit)」が必要になりました。私たちは日本を「許可証学(Permitologie)」の国と呼んでいました。徒歩旅行をしたこともありました。私を乗せようと車が止まってくれたときには、乗せてもらいました。そうすると何かを聞かれるので、とにかく「私はドイツ人です」と言いました。どこから来たのかとか、まったく違うことを聞かれたのかもしれません。つまり質問を取り違えて答え

ていたのかもしれませんが、相手がたっぷり質問し、私もたっぷり話すと、相手もすべての質問に合う答えを得たのです。私の語学力不足のために、起こり得るあらゆるデコボコが生じたのですが、私はほとんどそれに気がつきませんでした。そして、私はドイツ人として、投宿したすべての旅館で歓迎されました。旅館の人に例の紙切れとパスポートを渡し、それで私の身分が明らかになりました。そうして私が熱いお風呂に入っていくと、当然私はセンセーションになりました。

私は神社仏閣用のスタンプ帳もっていました。寺や神社に行くとこれを渡し、絵で飾られたりしている美しいスタンプを押してもらいました。今とは違って、当時は寺や神社で拝観料を払う必要はありませんでした。

ある郊外電車のなかで、兵隊たちが白い布で首から木箱を下げて入ってきたときに、全員立ち上がりお辞儀をしたのを見て、強い印象を受けました。その箱には戦死者の遺骨が収められていたのです。夜に部隊が中国戦線のために召集されたときにも同じように濃密な雰囲気を感じました。彼らは、私がまったく知らない独特な響きの音楽と灯りに伴われて村から駅まで送られて行きました。しかし、その光景はとても重いものでした。

日本が真珠湾を攻撃した1941年12月8日の夜、私は神戸から東京へ向かう汽車に乗っていました。私たちは神戸で芝居を演じ、仕事をしなければならなかったのが夜行で戻るところでした。汽車のなかは緊張していて、ひそひそ話が聞こえ、人々が急ぎ足で行ったり来たりしていました。駅に止まるたびに乗客たちは外へ出て何かを探していました。おそらく新聞を探していたのだと思います。私たちは何が起きたのかわかりませんでした。万歳の声はありませんでした。人々は戦争が始まったことを喜んではいませんでした。本当に重い雰囲気でした。東京に着いてから大使館で私たちは何が起きたのか知りました。

東京ではナチスから距離を保つことができました。少なくとも私はそうしていました。党がドイツでかけていた圧力を東京にも加えてくるというようなことはありませんでした。確かに私たちはそのことを知ってはいましたが、したくなければ、それにはまったく加担せずすみしました。というより、日本にいたドイツ人は誰もナチズムに拘束されていると感じてはいなかったと思います。そのようなことを見聞きしたことはありませんでした。

外国人女性でも問題なく晩に銀座をぶらつくことができました。映画館から「太陽は昔ながらの調べで兄弟の空に競いの歌を響かせている……」と聞こえてきたことがありました。入るしかありませんでした。それは『天のプロローグ』を語るヴェルナー・クラウスの古い映画でした。日本人がこの映画を見に行っていたのです。

昼食を私はたいてい町で食べていました。大きなデパートには食堂の表に一種の陳列用テーブルがあって、料理が並べられていました。私は昼になるとそこに行って、料理を指差せばそれをもらうことができました。たとえば、私はつゆ蕎麦を食べ、これを礼儀正しく口に運ぶように努力しました。私の周りに立っていた人々が「なんて上手に箸で食べるのだろう」と言っていました、それは全く厳しい評価だったのです。というのは、私は音をたててすすべきだったからです。日本のつゆ蕎麦を食べるときにはそうしなければならぬのです。私はすすらなかつたので失格でした。

ドイツの会社に勤めていたので、私には日本をよく知るドイツ人の同僚がいました。私は彼らとよく遠出をしました。あるとき、私たちは富士山に行きました。シーズン中だったので登山が目的でした。同僚たちは、日本人のハイカーのあるグループが私たちのことを話しているのを聞いて突然笑い出しまし

た。ある人は、私がかかなりの年だろうと言っていました。大きな花柄の服を着ているからそんなに年をとっていないだろう、見かけほど年をとっているならあんな派手な格好はしないだろう、というのがそれに対する意見でした。夕方私たちは富士山に登り始めました。山腹は、曲がりくねった道を頂上に向かうグループで賑わっていました。とくに目立ったのは巡礼の女性たちでした。彼女たちは白い衣装に身を包み、幅広のつばの付いた大きな帽子をかぶり、手には小さなランプをもっていたので、山腹全体が蛍で一杯になったように活気がありました。彼女たちは歌いながら登って行きました。登るのはかなり大変でしたし、寒かった。道にはあちこちに小さな休憩所がありました。そこまで登って行っても「空きはないよ」と言われることがしばしばでした。一人がはい出してきて、道を先に進んで行くと、「さあ、あんた入れるよ」という救いの言葉が聞こえてきました。すぐに、空いたばかりでまだ前の人のぬくもりが残っているフトンのなかにもぐり込みました。暖かく気持ち良かったのですぐに眠り込み、隣の人に突つかれて「先へ進むよ」と言われるまで眠りました。こうして私たちは登って行き、ちょうど日の出のときに頂上に着きました。それは、心が踊るような素晴らしい自然のドラマでした。ゆっくりと夜が明けて、太陽が輝きました。感動が私たちを満たしました。そして、ほかの人々と同じように、私たちも大声を出しました。

後に、戦争中私は中国でも日本人に出会いました。太原には大きな日本人社会がありました。山西省の太原は鉄や石炭などの原料のために日本にとって非常に重要だったからです。コロニーの日本人は毎朝国旗掲揚のために集まりました。日本人は程度の差こそあれいつも彼らの内部にとどまっていました。彼らのところではすべて整然とことが進められていました。共産主義者たちが太原に来たときに、日本人は飛行機で飛び去って行きました。このときも彼らは非常に優れた組織と規律の印象を残しました。

日本・上海間の船は日本の降伏まで運航されていました。上海には太平洋戦争のために日本では手に入らなくなっていた多くのものがあったので、日本に暮らしていた西洋人は買い物に上海まで来たり、品物を上海から送らせたりしていました。

日本人は上海で演じられたドイツの演劇を素晴らしいと感じていました。彼らは19世紀の作品の上演に特別招待されました。ズーダーマンの『聖ヨハネ祭の日の前夜』は何度も上演されました。日本人は上海では自分たちの演劇を上演していませんでした。また、彼らが何かの催しをすることがあっても、私たちは招待されませんでした。

しかし、日本では私はよく日本の演劇を観に出かけました。たとえば、『ブレスラウの鐘の鑄造』を翻案して演出された、鎌倉の大仏の鑄造を描いた芝居がありました。一人の若い女性が狂気に陥り、白い光を浴びて大仏の手の上で踊るのです。巨大な像の鑄造を成功させるために、彼女は父親によって溶けた銅のなかに突き落とされて殺されてしまったのです。それは、20年代のドイツでよく演出されていたような、たいへんモダンな芝居でした。ミュンヘンで学んだ若い日本人の演出家がそれを上演しました。そのようなこともありました。

(聞き取りは1995年5月11日にボンで行なわれた)

5. ルドルフ・フォル氏の体験

Rudolph Voll: 生年月日・出身地未確認。ベルリンで車体設計者として働き、1936年ドイツ脱出。南アフリカ、中国を経て1937年来日。東京のヤマタケ社に勤務した後、1938年から真珠商として東京と香港に在住。

私は、言わば自分の意志に反して日本に行くことになりました。日本に行きたいとはまったく思っていなかったのです。1936年に反ナチだった私は南アフ

リカに逃げました。伯父の会社で車体設計者として働いていました。工場経営者だった伯父は、私が夜陰に乗じて出国する支援をしてくれました。南アフリカで私はすぐにある会社に勤め口を見つけましたが、現地人労働者と白人の間にあった緊張は私にとって耐えがたいものでした。そこで、私は上海まで行く決心をしたのです。上海が、何らかのかたちでナチズムの圧力がかかることのない到達可能な最後の土地であるように思われたのです。私は上海で自動車の車体を製作するヴォルフ & CO に職を得ました。しかし、私が到着したその日に、中国人は自ら町に爆弾を仕掛けて日本人から逃れようとし、市中は死骸でいっぱいになりました。もちろん、私はここからも出て行きたいと思いました。ドイツ総領事が、ドイツ人の保護を断念します、船が黄浦江の河口で待っています、この船はマニラへ行きます、と言いました。

超満員の船に客室はありませんでした。デッキには人々が鈴なりになっていました。朝起きると、南ではなく北に向かっているのに気がつきました。台風が私たちの針路をさえぎったのでした。こうして私は日本へ文字どおり吹き寄せられたのです。船は神戸に避難所を求めなくてはなりませんでした。1937年8月25日のことでした。

私は船上の何度も開かれたパーティーのせいで声が出なくなってしまい、専門医に診察してもらうために上陸させてくれるよう紙に書いて船長に頼みました。しかし、私は専門医のところへは行きませんでした。神戸がすぐに気に入る、私は船と別れました。船を降りたのは私だけでした。

私は、上海から来た白ロシア人のガールフレンドと神戸でロマンチックな1週間を過ごしたあと、6円だった急行の3等車に乗って東京に行きました。汽車のなかで目についたのは奇妙な光景でした。背広を着ている人は一人もおらず、みんな暑さのためにステテコ姿で歩き回っていたのです。

私はドイツ大使館に届を出さなければなりませんでしたが、ベルリンにいた

両親のことが頭に浮かびました。大使館では、日本に滞在するなど問題外だ、横浜に停泊している貨物船にジャガイモの皮むきの仕事があるからすぐに行きなさい、と言われました。しかし、ドイツ大使館が日本の出入国管理当局に取って代わることは許されません。私は結局残れることになりました。私にはエンジニアとしての経験があり、英文タイプを打つことができたので、ケルンのシュッテ社と提携して紡績機を輸入していたヤマタケに雇われました。地方の教員の月給が40円でしたが、私は週3日で300円の初任給をもらいました。

一番の支出はアパートの家賃で、小さな一軒家より高い60円でした。私は築地ビルディングに住んでいました。この建物は今でもありますが、後に〈Overseas Chinese Building〉と呼ばれるようになりました。当時は真新しく、梁の高さは1.8メートルありました。たいていの日本人は1.6メートルぐらいの身長しかありませんでしたが、この家のなかでは私でも楽に動くことができました。

この建物は本願寺の向かいにあります。このアパートの利点は、毎日自転車で市場に行けることでした。2円でリンゴを1箱、木箱ごと買えました。あるとき、柿を食べ過ぎると身体にどんな影響があるか知らずに、1箱買って来たことがありました。というのも、柿は消化を促進する作用が非常に強いのです。でも、ほかに食べるものがなかったのです。

自由はたくさんありましたが、カメラをもって散歩することは別でした。まもなく知るところとなったのですが、それは駄目でした。私が東京に来てちょうど1週間たったときに靖国神社で祭があり、私はカメラをもって出かけました。まだ1枚も写真を撮らずにぶらぶら歩いていると、一人の憲兵が足を突き出して私をつまづかせて倒そうとしたのです。しかし、私はそれに気がつき、この男の胸を肘で突きました。すると6人の憲兵に取り押さえられ、隊長のテントに引きずられていきました。当時の写真撮影に対する神経過敏はこんな具

合でした。この隊長は理性的でした。彼は、みんな神経質になっているのです、と言って謝罪しました。しかし、私は気が済みませんでした。すぐに大使館に行って、後に日本について本を数冊書いたクルト・マイスナー⁹に会いました。彼は、あなたは幸運を運んできた、と言って私を抱きしめました。大使館はちょうど問題をひとつ抱えていたのです。日本のハンブルク総領事の息子が学校友だちに石を投げられ、ドイツ側ではその釣り合いをとるものを探していたということでした。ちょうど良いときに私が現れたというわけです。

数週間後に私は大使館から、ダーク・スーツをもっているかという電話連絡を受けました。靖国神社にいた大尉の上官である将軍が、私に謝罪したがっている、ということでした。たいへん打ち解けた面会になり、トカイ・ワインの杯も空けました。しかし、友人たちには、日本での君の今後は危うい、と言われてきました。軍が一人の外国人に頭を下げなければならなかったというのは非常に問題だから、と。

しばらくして、オランダ人のガールフレンドと私は大島に渡りました。帰りの船上で見上げると厚い雲が広がり、その上に太陽が見えました。太陽はパチンコ玉のように見えました。私は写真を撮りましたが、その瞬間、後ろから押さえ込まれました。「立ち入り禁止区域での写真撮影」のためでした。そこはもちろん「区域」ではなく、水と雲しかありませんでした。写真はとても面白いものになったはずでした。それに土地は写っていませんでした。横須賀軍港から少なくとも50キロは離れていたのです。私は船から普通に降りることができましたが、それは一緒にいたガールフレンドがオランダ大使館に勤めていたからです。さもなければ私はすぐに捕らえられていたでしょう。しかし、しばらくして出頭命令がきました。私は警視庁の向かいの建物で尋問を受けました。そこには現在昔の様式で新しい石の建物が建てられています。日本に関す

9 1頁参照

私の知識はまだ数週間の滞在から得られたものでしかありませんでした。ドイツ人の弁護士が来ていて「何というバカなことをしたのだ」と言われました。私が反論すると、彼は「よく考えなさい。刑務所に入れられてしまいますよ」と言いました。つまり、私は牢屋に片足を入れていたというわけです。しかし、日本人は理性的でした。それ以上何も起こりませんでした。

食料が配給制になると、日本政府はすべてのドイツ人を通常の配給枠からはずし、その代わりドイツ人社会にそれに相当するものとして計画された配給をしました。ドイツ人社会の本拠は当時、ドイツ大使館に近い平河町にあったOAG会館でした。現在国会図書館が建っている場所にドイツ大使館の土地がありました。私たちは何かを食べようと思えば、そこに定期的に足を運ばなければなりません。連中は、反ナチ分子だった私にも、支給したくなくても食料を渡さなければなりません。

アルコールは買えません。肉は缶詰だけがありました。新鮮な肉はほとんど見ませんでした。肉は大陸から輸入されていたものだと思います。中国人は満州で演じられた茶番劇によって踏みにじられても生産は続けていたからです。中国・日本間の貿易は朝鮮の釜山を経由して行なわれていました。この短い区間は終戦までアメリカに脅かされることはありませんでした。

日本側からの配給のほかに、私たちはドイツの仮装巡洋艦がオーストラリアの船を拿捕して奪った品も受け取りました。当然それで私たちの生活は少し楽になりました。しかし、そういうこともなくなり、生きたいと思えば、東京に住んでいたすべての日本人と同様、田舎の人々とのつながりをもたなければなりません。もっとも、私は自分が何を食べていたのかあまり覚えていません。私はとにかく真珠を売るのが忙しかったのです。私は東京で唯一人の真珠商でした。

私が働いていたヤマタケには、数週間おきに米国生まれの日本人の真珠商が来ていました。この人がネックレスを6円で提供してきました。6円は当時1ドルでした。私は彼にどこで入手したのか聞きました。彼はアメリカに帰るところで、私に住所をくれました。そこへ行くと歓迎されました。私が自分の客を彼のところへ連れて行くと、この客は彼からたくさん買い込みました。翌日彼は私のオフィスに来て、金の入った封筒を私に渡しました。コミッションでした。「どういうことですか。私は友人に隠れてコミッションは受け取りませんよ」と言いました。それで私は客から絶大な信用を得ていたのです。私は預かった品に対して預り証を渡したことは一度もありませんでした。誰もが、私に預けておけば金庫に置いておくより安全だ、と言っていました。これが真珠商としてのスタートでした。1938年のことです。

1年後にヨーロッパで戦争が始まりました。アメリカにいた若いドイツ人は、アメリカ人ではなかったにもかかわらず、アメリカの兵役に服するように要請されました。彼らはもちろんそうするつもりはなく、多くのドイツ人が急いで太平洋を渡って東京に来て、東京から汽車で下関に行き、そこから船でさらに釜山に行き、ロシア経由でドイツに帰りました。その流れは止むことなく、彼らは私の客になりました。彼らはまだ国際関係をはっきりと理解していなかったので、白い顔をしていない人間をまずは信用しませんでした。そのため私は取引を全部引き受けました。私は買い得な値段で売っていました。私が6円（当時は3.5マルクでした）で売ったネックレスが、ベルリンの店では600マルクしました。それをみんな知っていて、私からたくさん買っていきました。あまり金をもっていない人々で、たいていは労働者でしたが、彼らは自分のカメラや時計や双眼鏡を私の真珠と交換しました。

そのほかドイツから直接やってくる金持ちの人々もいました。ノウ・ハウをもってきて日本の軍需産業を支援したエンジニアたちです。潜水艦で来た人々もいました。そのような旅はひどいものだったに違いありません。たいていの

人は封鎖破り船で喜望峰を經由してシンガポールまで来て、そこからは援護作戦に守られて来ました。彼らが日本で買うべきものは何もありませんでした。真珠以外には。真珠をもたずに帰ろうとは誰も思わなかったでしょう。

大使館で私はヴェーゲナー提督と知り合いました。彼は非常に思慮深い人物でした。エルヴィン・ヴィッケルト博士¹⁰もいました。彼はナチ党员ではありませんでしたが、名目上そうだったに過ぎないという面がありました。私は大使館でも真珠を売っていて、1942年に大使館を訪ねた時のことです。日本が北オーストラリアへの侵攻したので、私がこの侵攻について「まあ、そんなに長くは続かないでしょう」とコメントすると、背中に鉛筆の先を感じました。「黙れ」というヴィッケルト氏の合図でした。このことを私は決して忘れないと思います。

日本で働いていたドイツの大会社の社員たちが給料として受け取っていた金は、スウェーデンとロシアを經由して日本に送られてきていました。ドイツからスウェーデンに行くのは簡単でしたし、ロシアが始めのうちは日本と交戦していなかったからです。ロシアが日本に宣戦布告し、満州に侵攻した終戦の10日前まで、彼らは給料を滞りなく受け取っていました。

私自身は真珠を外国に送ってはいませんでした。私の顧客たちは自分で送ってしていました。やろうと思っても私一人でやるのは無理でした。私は1942年には東京で唯一人の真珠商だったのです。旅行者たちはドイツでおそらく戦争成金に真珠を売っていたのでしょう。戦争成金はどこにでもいました。ヨーロッパには作り物の装飾品や金製品は何でもありましたが、真珠はありませんでした。真珠はちょうどこの時代にポピュラーになったのです。1927年に

10 21頁注8参照。

前に真珠は買えませんでした。パリの真珠商たち、いわゆる「真珠マフィア」は、レーヴェンタールが先頭に立って、日本で真珠の養殖を開発した御木本幸吉 (1858-1954) を告訴し、敗訴しました。御木本は彼の真珠を自然の真珠と同様に「本物」と呼ぶことを認められました。彼の真珠は決してイミテーションではなかったからです。御木本はもともと貧しい製麺業者でした。彼は、真珠ではなく、ケシ、つまり、中国人が買いつけて細かく砕いて粉にし美容薬にしていた自然の真珠を養殖するという考えをもっていました。この小粒の真珠は、あらゆる貝がもつ自然の産物であり、現在でもシンガポールのどの薬屋でも買うことができます。御木本ははじめ装飾品のことはまったく考えていませんでした。のちに、この真珠が装飾品に向いていると提案されたとき、彼はちょうど破産して、債権者に見つからないよう北海道に隠れていなければなりません。その後彼は、貝殻の内壁の真珠袋に発生するモベと呼ばれる半円真珠を養殖しました。御木本は方法を発明したわけではありません。しかし、生物学者は誰もこの汚れ仕事に手をつけようとはしませんでした。その代償として彼は特許を得たのです。

私は日本の戦争成金にも売りましたが、相手はザイバツ (財閥) だけでした。たとえば、カワサキ氏です。彼の奥さんは30歳も若いスコットランド人でした。彼女は上海で看護婦をしていて、彼の看病をしたのです。私は、OAGのすぐ下にあった彼らの御殿を訪ねたことがあります。私は南洋のネックレスを売り、1万円を受け取りました。1万円といえば当時はひと財産でした。地位の高いサラリーマンの月給が75円でしたから。

普通の日本人は装飾品を買うことを許されていませんでした。ダイヤモンドはすべて法律により拋出しなければなりません。こうしたダイヤモンドはもちろん使われず、30年後にそれらは競売にかけられました。東京駅の階段の金属や真鍮もハンマーで叩き落とされました。階段は破壊され、そこを降りて行くときには首の骨を折りがねませんでした。しかし、その金属が使われる

ことはありませんでした。鐘やその他のものも同様でした。戦争はひどいものです。人間の理性の留め金が完全にはずれてしまうのです。

戦争が始まった頃、日本にはアメリカへの移住を希望する非常に多くのユダヤ系ドイツ人がいました。アメリカへ渡ることが不可能になったとき、彼らのうちの多くは上海に行きました。日本人は、リトアニアとラトビアで7000人に査証を発行し、上海にユダヤ人の避難所を用意しました。国際地区の橋のたもとにあった大きな茶色の住宅群、ブロードウェイ・マンションです。ドイツ名をもつ、後のアメリカの財務大臣がそこにおいて、彼は日本側の扱いについて感謝をこめて報告しました。これは、ドイツ・日本両国家間に大きな不一致があったという印です。

私は、有名な日本の辞書出版者、フジサワの息子も属していた小さなサークルに入っていました。彼はとても大きく、彼の足に合う軍靴はありませんでした。そのため彼は入隊を免除されました。私たちのグループをカール・キンダーマン博士が定期的に訪ねてきました。彼は、私たちにバーゼル新報をもってきてくれました。私たちは彼がユダヤ人だったことを知っていましたから、自分たちの意見を自由に言うことができました。彼がゲシュタポのために働いていて、ブラックリストを作成していたということが分かったのはあとになってからでした。

(1945年?)の5月19日に私は逮捕されました。日本の秘密警察(特高=特別高等警察)の3人の高官が私を訪ねてきて、「申しわけありませんが、あなたを連行しなければなりません」と言いました。その任務は彼ら自身に発するものではなく、ナチが私を収容所へ入れるように指示してきたのだということでした。「私たちはあなたには何も含むところはありません。あなたはここにもう7年も住んでいるのですから。どうかお許しください……」。誰に対してもこのような穏やかな逮捕であればいいと思います。彼らは私に目隠しをしまし

た。そして、彼らが目隠しを取ってくれたとき、私は東京の真ん中の小石川にあったカナダ系女子修道院の門の前に立っていました。ドイツ大使館には、警察の機能をもつ部署がありました。そこはドイツ同胞の不利益になることを直接することはできませんでしたが、日本の警察を通してやるのは可能でした。

修道院は5日後に空爆の犠牲になり、すっかり焼け落ちてしまいました。私たち14名の収容者はズボンの尻を焦がし、半ば干からびて脱出することができました。それが、ナチが私たちを東京の真ん中に収容した理由でした。そうすれば連中は私たちを虐殺して死体を運ぶ必要がないからでした。連中は、それをアメリカに任せた方がはるかに安上がりだと考えたのです。そして5日後に事実そうになりました。幸い私たちは命からがら逃れたのです。

その後、私たちはすっかり空になっていた上智大学に身を寄せました。家具すらもうありませんでした。そこで暮らすことはほとんど不可能でした。私たちに決して嫌がらせをしなかった見張りにとっても同じことでした。

一緒に囚われていたうちの一人は、ミュンヘン裁判でヒトラーを「道化」と呼んだ検事のベッカー博士でした。1933年に彼は頭をすばやく切り替えなかったために逮捕されて、10ヶ月間アルプレヒト通りにあった地下牢でナチに手荒い扱いを受け、その後無国籍者として日本へ送られました。彼は日本で失業者となり、ようやく戦後に東京の福岡ビルに弁護士事務所を開きました。その他には、トーマス・マンの義理の弟、ハンス・プリングスハイムが息子のクラウスと一緒にいましたし、ある金属会社の支社長フィーゲルと、アルミニウムの特許をもっていたティーデマン博士がいました。

日本の終戦を私たちはフランチェスコ会修道院内の収容所で迎えなければなりません。私の妻は私たちによく食べ物をもってきました。この修道院を私は2週間前に戦後初めて訪れました。ドイツの放送局のレポーターがそれを可能にしてくれました。

ドイツの終戦をすでに私たちはドイツ人コミュニティーから配布された戦勝報告にあまり勝利の知らせが載らなくなったのを見て予期していました。そのほか、私たちはスウェーデンやスイスのような中立国からの国際報道も入手していました。それで私たちは第3帝国の没落が近いと予想することができました。

戦後私は赤十字をとおして両親について個人的な情報を受け取りました。ほかにはドイツとのつながりはありませんでした。私は短波ラジオを聞きませんでしたし、そんなものがあることすら知りませんでした。

当時、私の知るところでは、3200人以上のドイツ人が日本にいました。その多くは日本に定住していたのではなく、船を失ったドイツ海軍の兵隊たちでした。箱根には、空き家になっていたサマーハウスがたくさんあり、これをドイツ人が借り受けました。仙石原地区にはふたつの大きなドイツ人のグループが住みつきました。ひとつのグループは水兵たちで、もうひとつは、ドイツがオランダと戦争を始めたときにオランダ領インド（インドネシア）から日本に船で運ばれてきた「バタビア婦人」¹¹のグループでした。彼女たちの夫はインドに収容されていました。当時、数百人のドイツ人海軍兵とやはり数百人のドイツ人女性たちが仙石原のあの狭い土地に一緒にいて何も起こらないはずがないのは明らかでした。そこから生じた問題は多様でしたが、非常に人間的でもありました。

米軍が日本に来たとき、ドイツ人は収容されませんでした。全員分類されました。多くの者は強制送還されました。彼らの財産や家やその他すべてのは没収されました。現在まで彼らはそれに対する賠償を受けていないと思います。私たちは、旅行したいときには許可を取らなければなりません。

11 蘭印婦人のこと。43頁および『文化論集第16号』138頁、140-141頁、175頁参照。

たとえば、東京から箱根に行きたいときに、私はこの許可を必要としましたし、箱根に着くと届出をしなければなりません。私は戦後、箱根の宮ノ下ホテルで暮らしました。米軍による配給に関して、反ナチとしての私の特権は当時絶大でした。たとえば、日本人には許されなかったことですが、私は車をもつことを許されました。

私の真珠取引を米軍は日本に来てすぐに禁止しました。私はそこで直ちに毛皮の取引を始めました。私が金の売買をしている、という事実に対する密告が私にとって大きな助けとなりました。私を尋問した米軍の少佐に、私は、未加工の毛皮を扱う人間がほかにいないから私とその仕事をしているのだ、と説明しました。私は人々が欲しがる毛皮を売っており、私の商売がアメリカにも仕事をもたらす。というのも毛皮はなめして縫い合わさなければならないからであり、それは決して悪いことではない、と説明したのです。その少佐は私のことを信じました。その上、彼は私にもっと大きな部屋を用意してくれました。そのことが、当時の私の思考力を救ってくれました。というのは、私は働き過ぎで、狭いホテルの部屋ではもう持ちこたえられなくなっていたからです。

お分かりのように、この危険に満ちた時代にも話のわかる人間が残っていました。こういうことがあって私は日本に強い愛着をもっているので香港と日本に住み、50年来、月に10日間この日本で過ごしています。

(聞き取りは1995年に東京で行われた)

6. イルムガルト・グリム夫人の体験

Irmgard Grimm: 1923年、神戸生まれ。1923年から1925年まで神戸に住む。1925年から1945年8月1日まで東京の大森に、その後1947年2月17日のアメリカの部隊輸送船「マリン・ジャンパー」による本国送還まで

軽井沢に住む。1942年まで学校に通う。1943年から1945年まで東京および軽井沢において秘書として働く。1947年から1949年までギューターローのイギリス占領軍で事務員およびタイピスト。1949年から1954年まで後にヘヒスト株式会社（当時はヘヒスト染物工業）に引き継がれたオッフエンバッハ製作所で秘書。1983年までヘヒストで働く。1985年10月より「もう一つの故郷」を訪ねて数回来日。

私は日本で生まれました。1911年にすでに BASF¹²社の社員として日本に行っていた父を追って、母は開戦直前の1914年に日本に行きました。母は、不幸な恋愛を体験して、できるだけドイツから遠くへ行きたかった、と話していました。「日本は十分に遠いかしら」と彼女は友人に聞き、決死の覚悟で日本に向かったのです。両親は1921年に日本で結婚し、1923年に私が生まれました。東京に大きな地震が起きた年でした。しかし、私たちはあのとき神戸に住んでいました。両親は、寄る辺のない人々を乗せた船が次々に神戸に着いたときの様子をよく話していました。2年後に父は IG 染料¹³の東京事務所に移動になり、私たちはドイツ学園があった大森に転居しました。

4歳頃まで私は日本人の子供たちと通りで遊んでいましたから、日本語もよくできました。もちろん子守や賄いの女性とも私は日本語で話していました。母は、私がドイツ語を話すのに苦勞していた、と言っていました。

5歳になったときに私たちは初めて休暇でドイツへ行くことになりました。父は4年に1回半年間の有給休暇でドイツに帰ることができたのです。今では飛行機で簡単に行ったり来たりできますが、当時はそうではありませんでした。私たちは列車でシベリアを経由してハンブルクへ行きました。この休暇の

12 Badische Anilin- und Sodafabrik（総合化学製造会社）

13 IG-Farben（ドイツ最大の化学工業コンツェルン。1925年創立、第2次大戦後に解体）

あとで日本に帰ったとき、私は一言も日本語が話せなくなっていました。ひどいものでした。水を取りに私を台所に行かせると、途中で引き返してきて「日本語でなんて言えばいいの」と言ったのよ、と母はいつも話していました。すべて消えてしまったのです。そこで、私は「台所日本語」のようなものを覚えなおし、また自分の言いたいことをいくらか伝えられるようになりました。日本のドイツ学園には日本語の授業はまったくなく、私たちの日本語はその程度のみでした。

日本人の子供たちが学校に入ると、私は彼らと遊ぶことはなくなりました。彼らはスクリーンから消えてしまったのです。彼らは私よりずっと多くのことをしていました。習字や踊りなどを習わなくてはなりませんでした。それで、私はドイツ人の友だちだけを探して、一緒に遊んでいました。小さな子供のいる大概のドイツ人家庭は、ドイツ学園に近い私たちの家からあまり遠くないところに住んでいたのです、たやすく行ったり来たりできました。

1940年頃、父は定年前に退職することを決めていました。大森のドイツ学園では中等教育修了資格まで取ることができました。子供たちはその後ドイツの寄宿舎付きの学校に送られるのが普通でしたが、私は一人っ子で、両親は私を手元から放したがりませんでした。私たちは一緒にドイツへ帰ろうとしていたのですが、その前に戦争が始まってしまったのです。シベリア経由の道も閉ざされ、私たちは日本に留まるよりほかありませんでした。

ドイツ学園は急場しのぎにさらに上級の課程までやることになりました。本来は中等教育修了資格まででしたが、私たちを第8学年まで大森で終えさせ、上海に送るように考えられていました。上海にはすでに大学入学資格試験を受けられるギムナジウムがありました。しかし、それもはや不可能でした。それで私たち4人の生徒は1942年に大森で最初の大学入学資格試験学年になりました。

私たちが1938年に中等教育修了資格試験を済ませたときに、ドイツ学園ではそれ以上の学年には進めなかったので、私の両親と友だちのフェリーツィタスの両親は、私たちをインターナショナル・スクールへ入れることに決めました。そこで私たちは英語を勉強することになっていました。この学校はイギリスの指導下にあります。私たちはこの時期にはすでに、一種のヒトラーユエグメントに入れられていていました。これはDJJ¹⁴と呼ばれていました。日本人とのハーフも入っていたからです。私たちは、ヒトラーがすべての民族を解放し幸福をもたらす、と教わりました。しかし、フェリーツィタスと私はインターナショナル・スクールに入って、ヒトラーがスコダ社を押さえるためにチェコスロバキアを占領したということを知り、びっくりしてしまいました。解放とはまったく反対だったわけです。親たちは、この紛争が私たちにとってやっかいなことになるだろうと心配し、私たちをインター・ナショナルスクールから退学させました。このことをイギリス人の校長先生は理解しませんでした。ここはインター・ナショナルスクールでありドイツ人もまったく同じ権利をもっている、と彼は言いましたが、あとでそれが難しかったことを理解したようです。

ドイツ学園が1939年に学年を延長したときに、私たちはまたそこにもどり、1942年に大学入学資格試験を受けました。

その後、私は語学学校に通い、すこし日本語を勉強しました。先生は、私が口を開くとほとんど気絶しそうでした。彼女は「何ということでしょう。あなたは良家のお嬢さんなのですよ。品の悪い下町ことばを話したりして」と言いました。彼女は、私がよその家に行ったときに言わなくてはならないことなども暗記させました。残念なことに私は今その礼儀正しい言いまわしをすべて忘

14 Deutsche Jugend Japans (日本・ドイツ青少年団)

れてしまいましたが、この学校で初めて、女が品の悪い話し方をするのはどれほど恥ずかしいことか理解したのです。

それからフェリーツィタスと私は勤労働員に駆り出されました。私たちはタイプを打つ仕事をしなければなりませんでした。フェリーツィタスは大使館で、私はドイツ人社会と党で働きました。戦争中ドイツ人社会にオランダ領インドから女性と子供たちがやって来ました。男たちは抑留されたのですが、女と子供は赤十字に引き取られ、日本とシベリアを経由してドイツに帰るようになっていました。しかしロシアとの戦争のために日本から動けなくなり、先へ進むことはできませんでした。彼女たち全員を預かることはドイツ人社会にとって大変な課題でした。ホテルを確保したり、客室をもっている公邸すべてに何人が受け入れられるか問い合わせたりしました。私の母は、とても感じの良い婦人と彼女の娘さんたちを家に連れてきました。この家族との交際は長く続きました。私より10歳くらい年下のリロという娘さんとは今でも連絡があります。学校はそれまでよりはるかに多くの子供たちを受け入れなくてはなりませんでした。それで私たちの校庭には、すべての子供たちが入れるように教室が4つある小さな建物が建てられました。

大森の私たちの家は洋風に建てられた家でした。私たちが、夏に東京の暑さから逃れるために、そして戦争末期には爆撃から逃れるために住んでいた軽井沢の家もそうでした。大森にはまだ5家族か6家族の西洋人が住んでいましたが、たとえばフェリーツィタスが住んでいた区域にはほかに西洋人はいませんでした。西洋人は、日本人ばかりが住んでいた区域では洋風の家が立っているところに住んでいました。ドイツ人家庭の使用人は、どこの洋風の家が空き家になるかいつも知っていました。

私にとってたいへん面白かったのは、一番仲の良かった友だちのヘラのとこ

ろに行くことでした。彼女の母親は日本人で、家は私のところとはまったく違っていました。ヘラの家族は日本家屋に住んでいて、たとえば靴を脱がなければならなかったりしたのです。

私たちの家には賄いと女中が一緒に暮らしていました。私が幼かった頃は、子守りもありました。うちは付き合が多く、両親は頻繁に外出していました。両親がいないときは和食が出されました。魚料理や日本蕎麦を食べました。母はいつも羨ましいと言っていました。母は和食が好きだったのですが、父が好まなかったのです。

賄いはたいてい家族から家族へ引き継がれて雇われた人たちでした。ある家族がドイツへ帰り、その賄いがドイツ料理を覚えていることが分かると、別の家族が好んでその人を受け継ぎました。そういう使用人は新しい家に入ると間もなく、すっかり家族の一員になったように感じていました。ドイツから手紙が来ると、うちの賄いは母の隣に立って、何が書いてあるのかたずねたものです。日本人の使用人は非常に忠実でよく気がつきました。1923年の大地震のときには、子守りが、自分のことにはかまわずに、なついていた子供たちを守ったという話がいくつもありました。彼女たちは休暇をとりませんでした。当時は使用人が休暇をとるということは普通ではありませんでした。彼女たちが1日でも家になかったということを私は思い出せません。夕食の仕度が終わると、彼女たちはたいてい、銭湯に行ってよいかどうか聞きに来ました。

契約といったものも結ばず、一切は誠実と信頼に基づいて行われました。給料は話し合いで決められました。パーティーがあって仕事が多いときには、他家の使用人たちが手伝いに行き来しました。彼女たちがお互いに親しいことも多かったのです。彼女たちはみんな西洋人の家族と対決しなければならなかったからです。

クリスマスにはガチョウの焼肉料理が作られました。それはいつも賄いと私の母にとってひとつの挑戦でした。うちにはたいてい客が来ました。まだ家庭をもっていない会社の若い人たちを招いたからです。ガチョウについてはいつも、魚粉を食べさせられないように注意しなければなりません。賄いは何ヶ月も前から、ガチョウを育てている男の人に「魚粉をやってはだめよ」と何度も言っていました。魚粉で飼育されたガチョウは焼くと魚の臭いがしてすぐに分かりました。ですから私たちはいつも焼く瞬間まで心配していたのですが、賄いが入って来て「大丈夫です」と報告しました。

大森にはパン焼き職人も一人いました。私たちは彼のところにクロワッサンなどを買いに行きました。戦争中は食料の調達はたいへんでした。時々ドイツの封鎖破り船がやって来ました。途中で敵船を捕獲し、食料を奪ってきたときには、ドイツ人社会にそれが配給されました。そのため日本人と比べれば私たちのところは良い方でした。もちろん、うちの女中たちはそれを少し分けてもらっていました。私は、米がだんだん乏しくなって行って米に大豆を混ぜたのも覚えています。女中たちは床にしゃがんで、大豆を拾い出していました。米を食べるときに、彼女たちは米だけを食べたかったのです。闇市は彼女たちにとってほとんど不可欠でした。

私たちが闇市に行きました。とくに軽井沢にいた頃です。大きな酒瓶をリュックサックに入れて自転車に乗っている自分の姿がまだ目に浮かびます。私たちは農家から週に1回牛乳を買っていました。フェリーツィタスと私は周辺の村々に行き、野菜を手に入れようとしました。私たちはすべての農家に行ってみましたが、何も譲ってもらえませんでした。空のリュックサックを背負い、うなだれて駅まで歩いて行くと、一人の農婦に会いました。彼女は私たちにニンジンやジャガイモが欲しいかと聞きました。私たちは自分の耳を疑いました。ついて行くと、彼女は麦茶を出してくれ、私たちのリュックサックを一杯にしてくれました。大使館員たちが彼女にそれらを注文していたのに引き

取りに来なかったために余っていたのです。私たちは、誰かに返せと言われない内にと急いで立ち去りました。

長野の辺りは有名なリンゴ産地でした。私たちは分散してあちこちの農家に行き、冬のためのリンゴを手に入れました。戦後、旧ドイツ海軍の軍人たちが、あそこにいたドイツ人の家を改修し、冬のために果物と野菜を貯蔵するのを手伝ってくれました。

服について話をすると、私たちのところでは、縫い子を家に呼んでいました。それが当時はごく普通だったのです。そのほか、うちの女中から私は毎年クリスマスに新しい着物をもらいましたが、それを私は、遅くまで起きていて両親のそばに座っていることを許されたときにだけ、入浴の前後に着ていました。

私が思春期に体験した集団生活は一言では説明できないようなものでした。DJJ は、私が11歳になった1934/5年に始まりました。後に私は、紅白の編み紐をつけたリーダーになりました。そんなことは私にはどうでもよかったのですが、すべてはいつも誰がグループをリードするかにかかっていた。私たちは、自分たちのリーダーのためだったら火のなかだって歩いたでしょう。彼女は模範であり、立派な人でした。彼女は私たちのところへ来る前は盲学校の先生をしていました。本当は政治的な事柄にかかわっているのに、そんなことには少しも気づきませんでした。

第3帝国の時代に私たちは絶えず行進などをさせられていました。しかし、すでにそれ以前にもフォークダンスや学園祭はしていました。学校で私たちは毎年クリスマス祭をして、演劇を上演していました。OAG はそのためにいつも会館を貸してくれました。いつも一番後ろの席まで両親や知り合いで埋まりました。これでたいへん強い団結が生まれました。

1938年に私たちは DJJ で大きなプロパガンダ旅行をしました。日本のボーイスカウトと落ち合って高野山に行き、奈良や日光や京都にも行きました。それが私の唯一の旅行でした。戦後になってようやく私は日本のあちこちに旅行しました。

一人っ子だった私にとって、あの頃は素晴らしいときでした。競走や遠足やハイキングはとても楽しかった。DJJ は日本の幽霊屋敷を手に入れ（人が首を吊った家で、日本人は幽霊が出ると言って怖がっていたのです）、そこで私たちは夜に秘密の集会をしていました。それと分かるユダヤ人が入ってくることはありませんでした。彼らはアメリカン・スクールへ通い、危険を回避していたのです。

DJJ では能楽も見に行きましたが、団員が音を立てないように気をつけていなければなりません。子供たちに能を鑑賞させるというのは無理な要求だったからです。先生のなかには、日曜日を犠牲にして私たちと一緒に上野の美術館に行ってくれるような人もいました。先生たちはたいてい私たちのグループのリーダーでもありました。

ドイツ人社会ではダンスや音楽の催しも開かれましたが、日本人のオーケストラの素晴らしいコンサートもありました。日本人の奏者たちとドイツ人の指揮者が演奏をしたこともよくありました。日本ではクラシック音楽が好まれていて、とくにベートーベンに人気がありました。

私の家では〈Die Woche〉誌をとっていました。両親はほかにイギリスの〈Advertiser〉も読んでいました。〈Advertiser〉はかなり長くもちこたえていました。その後、私たちはドイツから〈Deutscher Dienst〉も取り寄せましたが、あれは操作されていました。

ドイツの降伏を私たちは大使館を通して知りました。みんな無線でつながっていました。その1週間前、リーダーの話のなかではドイツはまだ勝っていたのです。

東京では、市電で皇居の門の前を通りかかると、みんなが立ち上がってお辞儀をするのが普通でした。私たちも同じようにするか、有名なドイツ式の敬礼をしました。私たちはDJJの記事、鉤十字をつけていましたが、注意を引いて不愉快な思いをしないようにしていました。

ドイツが5月8日に戦争を終わらせたとき、日本人はそのことを理解しませんでした。あのとき、私たちは軽井沢にいました。日本人が興奮して、日本は決してそうはしない、と言っていたのを私はまだ覚えています。でも、それからやはりそうなったのです。

大森では空襲を体験しました。日本人は、火が広がらないように、家の並びを何列かすっきり取り壊しました。しかし、廃材を置いたままにしていたので、焼夷弾が落とされると何もかも燃えてしまいました。東京へ通じている鉄道にはよく爆弾が落とされました。ですから、友だちのヘラと私はいつも一緒に自転車でオフィスへ行っていました。彼女はいつも正しい道を知っていました。途中で私たちは、空襲で焼き出されて親類のところへ向かう人々のどこまでも続く列に出会いました。子供を背負い、手にティーポットを下げ、ほかに何かを引きずっていました。でも、誰も嘆き声をあげていませんでした。

親たちは先に軽井沢の山に行っていました。1945年8月15日のあと、私たちも彼らのところへ移りました。あそこで細々と暮らし、1947年に本国へ送還されるまで、ドイツ人社会のために引き続きタイプを打ったり学校の手伝いをしたりしていました。

広島について最初は何も聞きませんでした。ひそかに敵の放送を聴いていた人が何人かいて、数日後にようやく噂が広がりました。私たちは、とても激しい空襲があって恐ろしく多くの死者が出たということしか知りませんでした。

戦争終結の天皇のことばを私たちは東京で聞きました。鉄道で大森から中心

地まで行ってみると、東京は完全に破壊されていて、皇居まで見通すことができました。自宅に帰ると、うちの使用人は私たちの不在中に空襲で焼き出された人々を大勢家に引き取っていました。今日はもう爆弾は落ちてきません、と私は彼女を安心させました。なぜですか、われわれは戦いつづけると天皇陛下は仰いました、と彼女は答えました。彼女は、天皇が話した皇室ことばを理解していなかったのです。しかし、それから号外が出たときに彼女は文字でそれを読むことができました。

(聞き取りは1995年2月15日にフランクフルト・アム・マインで行われた)

7. ウルズラ・リーネルト夫人の体験

Dr. phil. Ursula Lienert (旧姓：ゾンダーホフ Sonderhoff): 1934年、東京生れ。1934年から1944年まで横浜に住む。1944年から1947年2月の本国送還まで鎌倉に住む。その後、1954年から1955年まで東京にいた両親のもとで日本滞在。1964年から1966年まで東京に留学。後に、ハンブルク美術・工芸博物館の専門職員として働く。

日本に住んでいたとき、私はまだ子供でした。父が1929年に日本に行き、母は1933年に日本に行き、そこで私が生まれました。父は弁理士として在日外国企業を代表していました。当時富士電機やほかの会社との重要なライセンス契約が交わされました。ドイツや他のヨーロッパの企業、たとえば(オランダの)フィリップス・フルーユランペン工業や(イギリスの)インペリアル・ケミカル会社などが数え切れないほどのライセンスを抱えていて、これを日本で売ろうとしていました。ヨーロッパの特許や実用新案も日本で出願しなければなりませんでした。私の父が働いていた会社は、私の記憶では、1918年からあり、最初は創立者にちなんでカール・フォークトという名前でした。父は1933年頃に共同経営者になり、その後会社はフォークト&ゾンダーホフという名前

になって、現在ではゾンダーホフ&アインゼルとなっています。

会社は当時、経営者の一人が黨員になった場合にだけ存続を許されました。そのために父は入党しました。フォークト氏はすでに年を取りすぎていたからです。それが、1947年に私たちが日本にいられなくなり、本国に送還された理由でした。

私は、はじめ横浜のドイツ学園に通い、その後個人授業を受けました。私には弟が一人いて、彼は横浜にあったドイツ人の幼稚園に通っていましたが、その後私たちは、ほかのドイツ人の子どもたちと一緒に鎌倉でドイツ人の先生、バーバラ・マインツァー夫人の個人授業を受けました。

横浜で私たちは山の手に近い持ち家に住んでいました。そこからは海を見渡すことができました。戦争末期になると、外国人が自宅から海を見ることは禁止されました。そのため私たちはその家から出なければならなくなり、明治乳業が所有していた家と私たちの家を交換しました。この会社は鎌倉にあった社有の家の1軒を用意してくれました。戦後、この交換が取り消されることになりましたが、残念ながら米軍が私たちの家をその間にすでに売却してしまっていました。

横浜の私たちの家は洋風建築でした。庭には和風の東屋があり、そこで私たちは時々スキヤキを食べました。その小屋の半分には庭師が住んでいました。もちろん家にはほかに女中もいました。子どもだった私は彼女に好感をもっていました。

幼い頃、弟と私は日本人の子どもたちとよく遊びました。その後はまったく一緒に遊ぶなくなりました。彼らが学校で忙しくなったからです。1944年に鎌倉に移ったとき、私たちは、そこでも日本人の子どもたちと遊べるだろうと考

えていました。しかし、日本側から見るとそれはあまり好ましくないようでした。鎌倉では私たちはほとんどドイツ人とだけコンタクトをもっていました。

私たちは、ほかの子どもたちのところへ行って、私たちと遊びたいかどうか聞くことも諦めていました。自分たちが日本人とは違うということを私たちはまったく意識していませんでした。私たちは、童話で鬼たちが赤い髪をしていたのをおかしいと思っていました。そして日本の子どもたちと一緒に、めかしこんだ西洋人を面白がっていました。

私はこうして大きくなったので、まず日本語を覚え、それからドイツ語を覚えました。しかし、1944年から日本人とのコンタクトは著しく減りました。そのため私の日本語は大したものではありません。

戦争末期を私たちは鎌倉で過ごしました。つまり私たちは、たいていのドイツ人が行っていた箱根や軽井沢では暮らしませんでした。ですから私たちはほとんど身内だけでいました。しかし、戦争末期に私たちは、山の方へ行くように忠告されました。私たちはそれまでに箱根に家を探していました。私たちがこの引越しのためにヘルメットをかぶりリュックサックを背負って鎌倉の駅に立ち、箱根の強羅へ行く列車を待っていたときに、天皇のラジオ放送がありました。それですべてが終わりました。

米軍が来ると、ひとつの県から別の県へと行くのに許可が必要になり、遠出は難しくなりました。しかし、私たち子どもにとってそれは大した問題ではありませんでした。私たちは鎌倉が気に入っており、引っ越しをせずに済んだことを喜びました。逆に、強羅に住んでいた友人たちが鎌倉に来るのにいつも特別許可を必要としていたことを私は知っています。とてもたいへんだったと思います。しかし、理由はいつも見つかりました、たとえば、鎌倉の歯医者や眼医者に行かなければならない、というような。横浜から来る友人たちもいまし

た。横浜は同じ県内にありましたから、面倒ではなかっただろうと思います。

私たちは犬を2匹飼っていて、毎日午後には鎌倉周辺の山へ散歩に行きました。北鎌倉、大仏の方まで行きました。これ以上に美しいものは思い浮かびません。満月のときにはいつも私たちは大仏のところへ行きました。月の光で大仏が壮麗だったからです。

よく海岸も歩きました。雷雨があると私たちはいつも、海面の発光が見られるのではないかと海の方を眺めていました。私たちは、海から八幡宮へと続く桜並木のある大通り沿いの、海から歩いて10分ところに住んでいました。

家族付き合いをしていたあるドイツ人が、山のなかの散歩は危険だと母に忠告しました。彼自身が、日本人にスパイではないかと疑われて呼び止められたことがある、と言うのです。それに、言うまでもなく、ゾルゲ事件という爆弾的な事件も起きていました。ですから、父も、急行列車で東京から鎌倉の自宅に帰ってくるときに、列車のなかで寝込んでしまって横須賀まで行ってから目を覚ますのではないかと、いつも心配していました。横須賀は軍港で立入禁止区域だったからです。

私の母はいつも子どもたちの服を縫ってくれました。生地はまだ手に入りました。それに対して、靴は問題でした。横浜の元町には素晴らしい靴職人がいたのですが、彼が軍隊に召集され、靴職人がいなくなってしまったのです。私は、両親がこうしたことすべてをどうやっていたのか知りません。私たちはいつも身に着けるものをもっていました。ただし、日本式の服で歩き回ったことは一度もありません。それは変だと思っていました。箱根ではドイツ人の女性たちも、モンベと呼ばれていた日本の伝統的な作業ズボンをはいていました。しかし、私たちはそれを気取りのように感じていました。

医療についても問題はありませんでした。ドイツ人の医者たちがいて、たと

例えばシュテーデフェルトさんは耳鼻咽喉科の医者で、扁桃腺の切除もしていました。手術はジェネラル・ホスピタルで行われました。私の弟もこの病院で1937年に生まれました。私自身は東京の西部病院で生まれました。病気にかかった記憶はありません。もっとも歯医者に行かなければならないことはありましたが、私たちは日本人の歯医者にかかりました。

戦争中の食料供給は比較的良好な状態にありました。私たちはたいてい洋食を食べていました。鎌倉には魚が豊富にありました。そして、牛乳配達人からクリームを手に入れました。日本人はクリームを好まなかったからです。バターを入手するのはたいへんでしたが、大丈夫でした。バターを食べなければいいのですから。父は、バニラ・エッセンスをちょっと効かせたサントリー・ウイスキーを飲んでいました。北海道からは素晴らしいアスパラが来ました。食の改善にはドイツ人社会と大使館が貢献してくれました。私たちは、たとえば、パンの包みを受け取りました。そして、時々配給された食品のなかにはコーヒーやマグロもありましたし、海軍の蓄えからカカオ・バターやオレンジ・マーマレードも配られました。それに、私たちは、他の多くの人たちと同様、自分たちで野菜も作っていました。

私たちは、ゴミ回収人をとおして、闇市とつながっていました。彼から米を手に入れましたし、どこからか木炭も入ってきました。当時は、車が少なかったので何を運ぶのにも使っていた2輪の荷車がありました。木炭を取りに行くときにはその荷車を使いました。自転車をその前に付けることもできました。

私たちはこの時期にはあまり旅をしませんでした。当時の旅の目的地は、スキーをするのには志賀で、夏には日光の中禅寺湖や強羅でした。大晦日には、戦争中私たちは好んで日光へ行きました。真夜中の儀式がとても美しかったです。ここでも私たちは見物人にすぎませんでした。私の両親は京都や奈良

に行ったことがあるのかもしれませんが、戦争中京都や奈良に行くのは原則的に困難でした。列車での移動に不安も感じていました。爆弾がいつ落とされるか分からなかったからです。

1947年の本国送還を、私はむしろ嫌だと感じていました。私たちは、「マリン・ジャンパー」という名前の船に乗り込みました。ひどかったのは、洗面所とトイレにカーテンが無く、乗員がなかを覗きこめたということです。寝場所は分けられていました。女性と子どもたちには専用の一列に並んだベッドがありました。船上では自由に動くことができました。食事は最高でした。それに映画も上映されました。素晴らしかった。この船で私は初めてターザン映画を見ました。日本にいたときにはこの映画を知りませんでした。

アメリカ人との関係は良好でした。アメリカ人とは私たちはすでに鎌倉でよく理解し合っていました。彼らは、私の両親に招待され、やっと営舎から出て市民の世界に入れたことをたいへん喜んでいたのでした。

ようやくドイツに到着すると、私たちはかなりひどい環境に置かれました。それからルートヴィヒスブルクの収容所に入れられました。ある体験を私はとくにひどいと感じました。私は、私たちより長く収容所に留まらなければならなかった父のために小さな壺にジャムを入れてもっていきました。収容所にいたドイツ人の男性たちはみんな、私からそのジャムをひたくろうとしたのです。やり切れない思いがしました。私はその男性たちを恥ずかしく思いました。父の収容所生活も長くは続きませんでした。父を置いて私たちは超満員の列車でハンブルクに行きました。私を驚かせたのは、私がドイツで聞いたたぐさんの教会の鐘の音でした。日本では、せいぜい1回ゴーンという音を聞くだけでした。あるいは、寺の鐘が新年になるだけでしたから。

(聞き取りは1995年3月23日にハンブルクで行われた)